Forget me not

加藤　大志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆｏｒｇｅｔ　ｍｅ　ｎｏｔ

【Ｎコード】
Ｎ２３５７Ｙ

【作者名】
加藤　大志

【あらすじ】
伊波利月は過去三回の完全試合で捕手を務めた。一人目は兄のように慕うジョニー、二人目はいけすかない奴だったサイラス。そして三人目がエリーシャ。エリーシャはＭＬＢ初の女性型ロボット投手だった。
エリーシャの登板日前日の晩、定期メンテナンスにきている伊波の恋人でありエリーシャの製作者メリリーは、エリーシャが今シーズン限りで別人になってしまうことを伊波にだけ告げる。彼女の身体はメンテナンスではどうにもならないほど壊れかけているという。

ＡＩを移した場合、これまでの記憶はなくなってしまい、違うエリーシャになってしまうのだ。
　試合当日、伊波はそのことで頭がいっぱいになってしまうが、反してエリーシャはセインツに移籍したジョニーとの投げ合いにも一歩も引かない最高の調子だった。あっという間に試合は進み、七回までエリーシャは完全にセインツの強力打線を抑え込む。七回裏、エリーシャの激励でようやく集中し始めた伊波はジョニーから決勝点となるホームランを打つ。
完全試合達成まであと二回、というところで、エリーシャの調子に異変が起きる。変化球を投げれなくなってしまったのだ。伊波は九回になってようやくそのことに気付くが、強気のリードでついに完全試合を達成させる。
帰りの車中、自分が伊波にとって特別な存在なのかを不安に思っているエリーシャに、伊波は娘のように想っているという意味でパパと呼んで良いと告げる。彼女はそのまま幸せそうに機能を停止した。話の最後にと、引退後の伊波はひとつのエピソードを語る。滞在しているホテルに、全米一位でドラフトされるであろう選手からボールが届けられた。それはあの完全試合の日、エリーシャが観客席の子供にあげてしまったウイニングボールだった。子供が成長し、手紙と共に返してきたのだ。
そのボールにはエリーシャの字で、「Ｆｏｒｇｅｔ　ｍｅ　ｎｏｔ」とサインされていた。

アメリカ三大スポーツの一つであるＭＬＢの世界で飯を食って二十二年、図らずもこれほど長い期間を第一線の捕手としてロースターに名を連ね続けられた幸運は神にいくら感謝しても足りることはないのだろうが、それ以上の幸運はその間に三度も完全試合を球場で見ることができたことなのは疑いようがない事実である。それが三度とも私がマスクを被った試合だとしたらなお更に。

皆さんが少しでも野球のことをご存知なのだとしたら、私の名前を知っていてもおかしくはない。私の名は伊波利月。高校を卒業してトライアウトからロサンゼルス・バッカニアーズに入団した変り種である。

なぜ日本のプロ野球界に行かずにいきなりＭＬＢを目指したのか？

単純に指名されなかっただけだ。なぜかは分からない。当時の日本球界のスカウトたちにでも聞いて欲しい。ともあれ私は運良くトライアウトに合格し、マイナーリーグにもぐりこみ、そして二年を経てメジャーに昇格した。考えなしに行動した割に、異常なほど早く結果が出たことは神に感謝しなくてはなるまい。正直に言ってツイていたとしか言いようがない。それは自覚している。

さて、私の話はこれくらいでいいだろう。主役は私ではないのだから。

一人目の完全試合達成投手はジョニー・ブラックウッドという男で、この男は真の人格者だった。気持ちを前面に押し出すタイプの投手で、打線の援護なく負けようが一点でも取られた自分を責めるような、責任感の強い真のエースだった。野球人としてだけでなく人間としても優れていて、メジャーに上がったばかりの二十歳そこそこの若造である私にも随分と良くしてくれたものだ。八つ上の彼のことを私は兄のように慕っていたし、今でも慕っている。

さて、二人目はサイラス・スーレという男で、この男は対照的な男

だった。彼が完全試合を達成したのは、確か私が四年目のシーズンだったと記憶している。マイナーから上がったばかりのシーズン三度目の登板で、その試合までの彼の防御率は０。つまり一度も点を取られずに連続で完封を挙げていた。メジャー昇格直後のルーキーとしては最高のスタートと言えるだろう。
だが彼をエースと呼ぶに足ると世に知らしめたのはその一試合が最後だ。
彼の名誉のために言っておくと、彼の才能は前述のジョニーなど比するべくもない十年に一度のものだった。私はそれを疑ったことはないし、チームの誰もそれを疑わなかった。スピード・コントロール・ムーブメント、そして頭脳。どれも申し分のないエースの素養だった。
人間性までは神は与えてくれなかっただけ。彼は勝つための努力を一切しなかった。全く練習も研究もしない、己の才能にあぐらをかいているだけの男だった。
彼はその試合以降、全く力を発揮できずに連敗を重ね、炎上を重ね、試合を壊し続け、二年後には放出された。その翌年にはシーズン開幕直後に故障者リストに入りシーズンアウト、さらに次の年にはそのまま誰に惜しまれることもなく引退した。噂では放出された後もほされた後でもパーティ野郎ぶりは変わなかったのだそうだ。憐れな末路には失笑するしかないが、今どこでどうしているやら。その先の噂はとんと聞こえてこないし、私自身も興味はない。私にとって彼は、端的に言って、実に嫌な奴だったのだ。
まさに私にとって対照的な存在であった二人の完全試合達成投手であるが、三人目はそのどちらとも違う存在だった。
ではどのような投手であったのか。これから私が皆さんに語るのはこの三人目の完全試合達成についてである。
その投手はジョニーのような数々の大記録を打ち立てたＭＬＢを背負って立つ本物のエースではなかった。サイラスのように自分の才能を過信して消えていった選手でもなかった。とはいえ活躍した期

間はほんの短い間だし、それほど大した通算記録を残したわけではない。
通算勝利数、ジャスト百勝。ＭＬＢ在籍年数五年。
それでも私は片時も忘れたことはない。これからも忘れることはないだろう。
あの日のことも、彼女のことも、決して。
ではお話しよう。私が三十歳の、メジャー十年目を迎えたシーズンに起きた奇跡。
――神と、とあるロボットが起こした、完全試合の奇跡について。

「なるほどぉ……」
感慨深げに頷いたのは、私の隣に座っているエリーシャ・ナッツ。背番号二八番、明日に登板が予定されている我らがバッカニアーズの投手である。貴重な左の先発投手としてその日までに九九の勝ち星を挙げ（ちなみに今年は十三勝）、ローテーションを外れたことは一度もなく、まだまだエースと称するには早いがその片鱗を見せていて――そして、名前からお察しの通り、なにを隠すまでもなくエリーシャは女性だ。少なくとも、見た目に関しては。
彼女こそが、奇跡の三人目。だがそんなことは当時の私は知るよしもない。
オールスターも終わったシーズン終盤、ア・リーグ西地区のドアマットチームであるバッカニアーズは例によって優勝争いから程遠いところで戦っており、選手たちのモチベーションは個人成績アップによる契約延長と首位苛めにしかなかった。
この日はホーム三連戦の二日目。対戦相手は、ボストンやトロントなどの強豪が揃う東地区をぶっちぎりで優勝に向けて走り続けているニューヨーク・セインツ。だが幸運にも昨日、そして今日、私たちは見事な首位苛めを全米に見せつけていた。
フィールドでは八回裏のバッカニアーズの攻撃が行われており我々が一点リードしていた。二死走者なし。順当にいけば私の打順は

回ってこない。私は溜息を一つついて防具を付け始めた。急ぐ必要があった。得点の可能性はもうほとんどないのだ。
「私が生まれた頃に、そんなことがあったんだ。リッキィの過去って凄く興味深いなぁ。ねえねえ、他には？」
「もう今日はおしまいだ。また今度な」
したり顔で腕を組んで頷く彼女を私は睨んだ。内心はよほどのことがない限り今日の登板はない彼女の暇つぶしに自分の昔話、それもマイナーからメジャーに上がった頃の失敗談など、を使ったことへの迂闊さでいっぱいだった。
まったく迂闊。まだ私には九回の表をクローザー、ハストン・ヒューズと共にシャットアウトする仕事が残っているというのに、こんなことでイラついている場合ではない。点差は一点しかないのだ。
「それから、何度も言うようだが――」
「リッキィと呼ぶな、でしょう」
先回りした彼女の言葉に私は黙り込むしかなかった。その邪気のない笑顔は、たとえ造られたものにせよ、効果抜群。私にとっては特に。それが私の目下の恋人、メリリー・ナッツと瓜二つであることを除いたとしても。
「分かっていることをあえてする、なんて嫌味なやり口、メリリーが教えたのか？」
溜息と共に出た私の質問に、エリーシャは小首をかしげた。
「マムはそういうのが男を落とすのに使えるんだって。落とす、ってどういう意味かな？　一体どこから男を落とすの？」
「……知らなくて良い、そんなこと」
私は彼女から目をそらしてレガースをつける作業に没頭しようとした。まったくメリリーの奴、自分の娘になんということを教えているのだ。子供というのは親のありようを見て育つもの。今のエリーシャはなにごとにも興味を持ち、親を真似たくなる年頃なのだ。
エリーシャは今年で十年目を迎える。メジャー昇格十年目ではない。誕生してからである。

彼女はメリリーの作りあげたロボットなのだ。
ＭＬＢの猛打者をきりきり舞いさせるスペックなど想像も付かない、まさしく人間の女性そのものと言って良い外見は製作者であるメリリーの「娘が欲しかったから」というだけの理由によるものである。お世辞にも趣味がいいとは言いがたいが、その理由のおかげでエリーシャ・ナッツという投手はＭＬＢきってのスーパーヒロインとして全米で人気を博している。対戦チームのファン以外に彼女にブーイングするものはいない。それどころか、稀にだが、対戦チームの選手が彼女からホームランをかっ飛ばして自軍のファンにブーイングされる、などということもあるくらいだ。
だがそんな彼女も、こと日常生活に戻れば十歳の少女となんら変わらない。少なくとも私はそう認識している。こと野球に関してはその限りではないのだが、私は彼女と接するとき、父親になったような面映さを感じていた。
あとは、そう――親の苦労もだ。
「女の子が男を落とす、なんて言うもんじゃない。明日の仕事についてだけ考えなさい。ちゃんと観てたのか？　スコアブックの確認は？　明日彼らを抑えるのは君の仕事だ」
はあい、と気のない返事をするエリーシャを尻目に、私は防具の準備を追えてフィールドに視線を移した。最後のバッターは既に追い込まれている。残念だが、追加点ならずここで回を終えることになるだろう。現在のバッカニアーズの打線は歴史的な貧打線なのだ。対するセインツは『聖者の行進』とも称されるほどの歴史的な強力打線。どこからでもホームランが飛び出し一イニングに何人もホームに帰ってくる姿からそう名づけられている。
私はまだ明日のことを考えている余裕はない。ハストンは疲労の影響からか最近調子を落としつつある。あと三つ、たったの三つのアウトを取ることだけを考え――
「今日、終わったらマムと会うんでしょう？　久々に」
――ている途中でそんな話題をふられて、集中できるわけがない。

横目で睨むがエリーシャは口笛の吹き真似でどこ吹く風だ。私は彼女の頭をつついた。
親の心子知らず。久々に日本のことわざを思い出した。
「君も一緒にな」
「お邪魔虫でごめんなさい。『あとはお若い方たちだけで』」
「……どこで覚えたんだ、そんなの」
ご丁寧に後半部分は日本語だった。語学という能力がロボットの場合比較的に簡単に習得できる点はうらやましいという他ないが、この場合は余計でしかない。集中力を高めなければならない大事なときに、どうして十歳児の冗談にツッコミを入れなければならないのだ。
親とその恋人のデートをからかうなんていうのは、彼女にはまだ五年は早い。
「デートがメリリーの目的じゃない。君のメンテナンスが本当の目的だ。仕事なんだよ」
私の言葉に、エリーシャは「ええ、また？」と露骨に顔をしかめた。
「なんか今年は多すぎるってー。心配性なんだから、マムったら……」
みなまで言わせず、今度は鼻の頭を指先で弾いてやる。一応ことわっておくと、表面上は人間と硬度は変わらないので私の指が痛んだりすることはない。
「自分の娘を心配し過ぎない親はいないんだ」
先発投手の一シーズンの登板数は、ローテーション次第だが、概ね三三試合前後といったところである。プレーオフに進出すればさらに増える。シーズン一六二試合を戦い抜く野手に比べれば負担は多少小さいものの（投手というポジション自体の負担はかなり大きいにしてもだ）、やはり定期的なメンテナンスが欠かせない。
明日、メリリーがＬＡにくるのはそれが目的である。今シーズンに入ってから、メリリーはエリーシャの登板前日に必ずメンテナン

スにくるようになっていた。特にそのことを不審に思う気持ちは、その時の私にはなかった。恋人である私に会っている間もないほどエリーシャに付きっ切りなのも仕方ないし当然だとさえ思っていた。そういう彼女を私は選んだのだ。

「私、どこにも異常なんかないのに……」

鼻を押さえながら反抗期の少女のように、頬を膨らませたエリーシャ。親の過干渉を煩わしく思う感情はやはりロボットでも人間でも変わらないらしい。はしかのようなそんな気持ちは皆さんも、もちろん私も理解できるはずだが――どちらかといえば既に私はメリリー側の人間だった。

「メジャーで何年もローテーションを守り続けるということがどれだけ難業か、メリリーは良く知っているんだよ。何年もプロの世界で飯を食ってたら、悪くならないほうがおかしい」

「リッ……リツキは十年間、一度も怪我してないみたいだけど？」

「私は特別。神に感謝だ」

私は当時も今も、神に感謝している。引退するまで大きな怪我らしい怪我がなかったというのは、時にランナーとのクロスプレイを要求される捕手というポジションにおいて、それも私が体格的に劣る日本人であるという点を鑑みても、非常に珍しい。

ツキがあったのも当然だが、もちろんそれ以前に、私が自分の身体に心を配り続けてきたからでもあるのは言うまでもない。

「誰もが私のように怪我なくいられる世界じゃない。でも、そのための努力を怠ってもいけない。自分の身体の声に耳を傾け続けるのは、プロの嗜みというものだよ、エリーシャ。絶対に自分を過信してはいけない世界なんだ」

誰かをあげつらうつもりはなかったが、私はサイラスのことを思い出していた。自分を過信したものの末路。エリーシャに同じ轍を踏ませるわけにはいかない責任が、少なからず私にはある。

「返事は？」

「……はい」

奥歯をかみ締め、彼女は自戒するように帽子を被り直した。
「異常がないならそれに越したことはない。取り越し苦労ならそれでいい。心配させるだけさせればいい。それがマムの特権なんだから」
長いこと粘っていたラストバッターがついに三振に倒れ、回が終わった。私はベンチから立ち上がった。ふと見やると、エリーシャはしおらしく俯いていた。それほど厳しい口調ではないつもりだったが――叱った娘をフォローする方法を誰か教えて欲しい、その時は真剣にそう思った。
結局思いついたのは、子供のように彼女の頭を軽く撫でることだった。どうかベンチの様子がテレビ中継されていませんように、と神に祈りながら。

「久しぶり、リッキィ」
にこりと微笑んだメリリーとの再会は、球場近くのホテルのロビーでだった。私は同じように微笑んで返した。人前でベタベタと肉体的な挨拶を交わす文化は日本人である私にはなく、メリリーもそれを理解している。
彼女との付き合いはもう五年。初めて出会ってから七年。私が郊外に小さな庭付きの家を買ってエリーシャがそこにステイするようになって二年。お互いのことを理解する年月としては十二分だ。銀縁眼鏡の奥に光る優しい目の動向だけで、メリリーが私をどう思ってくれているかは理解できる。彼女の細身の身体を抱きしめる必要はない。そうしたいという衝動に駆られたとしても。
イマイチ盛り上がらない（ように見えているらしい）お互いの雰囲気に、エリーシャは大いに不満そうだった。
「ねえ、マム。久しぶりに会ったんだから、もう少し嬉しそうにしたら？　リッキィも――」
「リツキ、あるいはイバ」
すかさず訂正するように私は言った。私のことをリッキィと呼ぶ

ことを許可しているのはメリリーだけだ。長い栗色の髪の三つ編みを大儀そうにもてあそびつつ、渋々ながらエリーシャは低い声でリツキ、と言い直した。
そんな愛娘の姿にメリリーは苦笑しつつ、
「嬉しいわよ、十分。でも先に仕事を済ませないとね」
「……ねえ、マム。私ならどこも異常はないから久しぶりに会ったときくらい二人で、」
「自分の体のケアをするのもプロの仕事のうちよ。ね、リッキィ」
「そう言い聞かせたはずなんだ」
肩をすくめるとエリーシャはますます頬を膨らませた。駄々っ子のように扱われるのはさすがに我慢ならないようだ。気遣いを見せれることをアピールしたい十歳児のプライドを打ち砕くのに私の小理屈は必要ない。マムの優しい一言があればそれでいい。エリーシャはふん、と私から顔を背けると、外で待たせているハイヤーの方へ足早に去っていった。
その後ろ姿を見つめながら、メリリーは「あの子ったら」とくすりと笑うと、私に向き直った。目が潤んでいるのは、愛娘が気を遣うことを覚えるほどの年月の経過について感慨深くなったのか、単に忙しい身の上で寝不足なのか。あるいはその両方かもしれない。
「今日はそれほど長くはかからないと思うわ。もし良かったら、」
「待ってるよ。この上ろくに話もしなかったなんていったら、あの子の明日の投球内容に関わりかねないからね。ここで会う？　それとも私の家？」
「……ここがいいわ。じゃあ、また後でね」
エリーシャと同じように三つ編みにした栗色の髪を揺らしながら、メリリーもハイヤーに向かっていった。メリリーが乗り込んだのと同時に、ハイヤーの窓からエリーシャが舌を突き出して酷い顔を晒したのが見えた。
私はホテル内のバーでメリリーを待つことに決め、向かっている間、十歳児だった頃のメリリーはあんな表情をしたのだろうか、と

考えて一人で笑った。

出会った頃のメリリーは今よりも野暮ったい大きな黒縁眼鏡をかけた一学生に過ぎなかった。少なくともメジャーに昇格して三年目、少々天狗になりかけていてもおかしくない時期の私にはそう見えた。実際そのシーズンが上手くいっていればそうなっていて、今の私はなかったのかもしれない。

私は未曾有の大スランプに陥っていた。二年目のジンクスならぬ、三年目のジンクス。私の打率は二割三分を超えたことがなく、私のポジションはいつ誰に奪われても納得せざるを得ない状況だった。開幕一ヶ月程度は自分のスロースターター振りに苦笑する余裕もあったが、五月、六月、オールスター直前になっても私のバットから快音が響く確率は一向に上がることはなかった。反比例するように三振の数はＭＬＢ記録に迫る勢いで伸びていた。

さすがにそうなってくると笑い事ではない。「ナンバーワンよりオンリーワン」などという甘い戯言の通じない競争社会で、結果は何よりも重要なことだ。

フォームを崩したのか、それとも私の実力の化けの皮が剥がれたのか。日々の練習を怠ったことはなく、また身体のどこを探しても怪我一つない。原因も分からずに、ただ結果だけが出ない日々が続いて、私の心は荒んでいた。ジョニーをはじめとした投手陣全員が私の守備力を高く評価してくれたとしてもなんの慰めにもならなかった。私が欲しかったのは結果と自信であり、負の連鎖から抜け出す転回点だった。

その転回点を与えてくれたのはジョニーだった。神と同じくいくら感謝しても足りることはない。私とメリリーが出会うきっかけを作ってくれただけでなく、あの年の私の打率が二割七部八厘まで持ち直したことも、こうして皆さんに語っている今の私も、全てこの日に端を発しているのだから。

オールスター中の軽い休暇の日（この年、ジョニーは肘の怪我で

オールスターを辞退している）、気晴らしにどうだ、と私は彼がよく行くというジムに連れられた。
　ジムに着いて着替え終えるなり、ジョニーは私の肩を叩いてランニングマシンを指差した。
「イバ、あの娘、見てみなよ」
私は『あの娘』とやらを見た。長い栗毛色の髪を三つ編みに結んだ、同年齢程度の可愛い子が走っているのが見えた。隣でそれを見ているのは少し厚ぼったい黒縁眼鏡をした、それでいて走っている娘に瓜二つの女だった。両者を見分けるのは、眼鏡の存在がなければ不可能だというくらい。どれくらいのペースで走っているかは知らないが、フォームから察するに結構なアスリートなのだろうと私は判断した。
「双子のアスリートかなにかか？」
「いい勘だよ、イバ。でも正解じゃない」
「じゃ、なにかの方か？」
「母娘だって言ったら、お前さん信じるかい？」
　にやりと笑ってそう言ったジョニーの言葉に、私は目を見張ってもう一度、一心不乱に走る女と黒縁眼鏡の女を見比べた。どう見ても同じ程度の年齢にしか見えない。どちらかに自分と同世代の子供がいるなど信じろというほうが無理だ。かつがれているとしか思えなかった。
　抗議の声を上げる間もなく、ジョニーはその二人に声をかけた。ほんの少し緊張に身を硬くした私のことなどお構いなしだ。アメリカ人は心の準備の必要なく女に声をかけられる性格の奴が多い。彼女たちはランニングを中断してこちらに向かってきた。
　走っていた方の女がにっこりと邪気のない笑顔を見せ、
「ジョニー叔父さん、こんにちは」
　と言ったのを聞いて、私は間抜けな顔を晒した。知り合いだったのかということと、普通に考えればどう見ても叔父と姪いう歳の差ではないということに対して驚いたのだ。

「名目上な、ややこしいことだが」
とジョニーに耳打ちされて、ようやく私は我に返った。やや遅れてやってきた黒縁眼鏡の方が「ハイ」と手を振り、にっこりと笑った。外見の割に社交的な性格なのかもしれない。私は「はじめまして」と芸のない挨拶を返した。さりげなく彼女の左手の薬指に目がいってしまっていた。そしてそこに指輪がないことに、私はジョニーにかつがれているという確信を得た。頭の中ではこんな可愛い子に叔父さんと呼ばれるどんな名目があるのか、ということに考えを巡らせ始めていた。
「眼鏡の方がメリリー・ナッツ。こっちはエリーシャ・ナッツ――二人とも、こいつが俺の大事な相棒、リツキ・イバだ」
そんな程度の簡単な紹介の後でジョニーが豪快に笑った。その様子を横目に見ながら私は溜息をついた。誘われたときの『気晴らし』という言葉の意味を考えると、嫌な予感しかしなかった。
「ジョニー、悪いが女の子を紹介しようっていうなら……」
私の言葉にジョニーは大げさに吹き出した。
「アホかお前は。『ミスター・何でも振ります』に大事な義妹を紹介できるか。まあ、黙ってついてきな。いつかこの出会いに感謝することになるんだから――よし、二人とも、行こうぜ。準備はできてるんだろ？」
「ええ、義兄さん」
「ええ、叔父さん」
この時点では、まだジョニーがどうして私をここに連れてきたのか首を捻るばかりだった。双子よろしく声を合わせたメリリーとエリーシャの関係についても、彼の、いつかこの出会いに感謝することになるという、予言めいた言葉についても。
「お待たせ」
メリリーは言葉通り、それほど時間をかけずにやってきた。私の隣に腰掛けてカウンターに銀縁の眼鏡を置くと、バーテンにスコッ

チソーダをオーダーした。少なからず、私は驚いていた。思っていたよりもずっと早く彼女がやってきたことに。
「早かったな」
「それほど時間はかからないから、って言ったでしょ。どうしたの？　昔を思い出してたような顔して」
「昔を思い出してたよ。君たちに出会ったときのこと」
「馬鹿ね……この、女ったらし」
　メリリーが少し頬を染めて呆れたように首を振ったので、私は頬を掻いた。どの単語が女たらし呼ばわりされる理由となったかは私には分からない。どうも英語の表現は難しいのだ。日本語で言うならもう少し気の利いた誤魔化しようもあるのだろうが、英語は二進法のようにゼロかイチのことが多い。
　やがて彼女のオーダーがカウンターに置かれると、私たちは軽くグラスを重ねた。
「で、野暮ったい黒縁眼鏡の私を思い出して一人で笑ってたの？」
「野暮ったい黒縁眼鏡をした大恩ある先輩の奥様の妹と、邪気のない笑顔でいきなりその先輩を叔父さんと呼んだ三歳児について思い出して、一人で笑ってた」
　ああ、そういうことね、と納得したようにメリリーは可愛らしく微笑んだ。
「義兄さんも人が悪いわ。ちゃんとあの子について前もって言ってあげればよかったのに。あの時の貴方の顔、日本のファンの子達が見たら嘆くでしょうね」
　私はなにも答えなかった。日本には何年も帰ってない。嘆かれようがどうでもいいことだ。どんな間抜け面を晒していたのかは自分では知るよしもないが、それほどに驚いたことは確かである。
ジョニーに連れられて室内練習場に連れて行かれた後、私はエリーシャ・ナッツが一体何者かを知った。彼女の左腕から放られた球が、九十マイルを軽く超えようかというスピードで私の胸元のストライ

クゾーンを通過したこと以上の驚きは、そうあるものではない。
　その時に私は、メリリーとエリーシャが母娘であると言う言葉の意味を知った。つまりはメリリーが天才的なロボット工学者でありエリーシャの製作者であることと、エリーシャの存在はピッチングマシンを進化させた形態のひとつであること、実際に人間から投げられたボールとピッチングマシンのボールとの差異をいかにして埋めるかがテーマであり人型であることに意味があること、そうした場合にロボットが人間を抑えることが可能なのかテストしたいということ、一級のＭＬＢロースターに名を連ねることは可能なのかテストしたいということ、ジョニーがその相手ならうってつけな奴がいると言ってきたこと、そのうってつけな奴というのがどういうわけか私だったこと。
他にも色々と細々した歴史的な講義やら社会的な意義やら製造過程を長々とされたのだが――どのような仕組みでエリーシャが動いているかも、作られているかも私にとってはどうでもよかった。純粋に感動していたのだ。
人間かロボットかという垣根は無視して、彼女はとても優れた投手だった。そして、優れた投手ではあったが、優れたピッチングマシンではなかった。彼女の球は磨き上げたムービングファストボールがほとんどだったし、その上コントロールは抜群だった。人型であることが前者の理由で、機械であることが後者の理由だとするならば、テストは大成功だ。その日一日かけても結局ほとんど打ち返すことはできなかったのだから。私の大したことのないバッティングセンスでは参考にもなるまいが、それでも一級の投手になるであろうことは容易に想像できた。
あの時の興奮を言葉にすることは出来ない。筆舌に尽くしがたいとはあの瞬間のためにある言葉だと思う。
スランプのことなど忘れるほどにバットを振り込んだのは確かだが、私は内心ではこの投手をどうリードしようかに頭を働かせていた。言うなれば、あれほど真剣に練習しなかった打撃練習は私の野球人

生において存在しない。捕手の性というものだ。
それでもスランプ脱出のきっかけになったのは確かだから野球というのはほとほと分からないものである。ジョニーの予言は当たった。
私は彼に、あの出会いに感謝している。
翌年、エリーシャは史上初のロボット投手（しかも外見はうら若き美少女）として全米一位でドラフトされた。私のいるロサンゼルス・バッカニアーズに。最終調整に私が協力したことは世間には知られていない。

過去の思い出話に花が咲いた後は、他愛のない近況報告にお互いの話題は移行した。久々の再会にはよくあるテンプレートだ。
しばらくしてバーテンからラストオーダーが告げられた。いつの間にか随分と話し込んでしまっていたらしい。時間を忘れるほど楽しい時間だった。私はミネラルウォーター、彼女は何杯目かのスコッチソーダをオーダーした。
「……あれから、もう七年になるのね」
「まだ七年だ」グラスを傾けて感慨深げに呟いたメリリーに私はそう反論した。「エリーシャは昇格してまだ五年だ。まだまだ活躍してもらわないと困る。まあ……ウチじゃチャンピオンリングは難しいかもしれないけどな。久々の三百勝投手の誕生だって夢じゃないんだぜ」
　私の言葉に、メリリーは呷ろうとしたグラスを口元で止めた。それは一瞬の出来事で、すぐに「そうよね」と微笑むと彼女は一息でグラスを乾した。
「珍しく、飲むな」
「飲みたくなることもあるのよ、私だって」
「飲みたくなるような、なにかがあったのか？」
　私は出来るだけ真剣みを薄めて聞こえるように努力した。メリリーが目を見張って私を見たところから察するに、成功したとは言いがたい。この時点での私の察しの良さは異常だった。目の前にホー

ムベースと打者の両足があるときと同じくらい鋭い勘が働いたのだ。
「……ううん、なんでも」
という彼女の言葉を鵜呑みにするほど私は愚かではなかったし、彼女もそんな誤魔化しが通用すると信じられるほど馬鹿ではなかった。私は主義を曲げ、彼女の手を握ってもう一度、今度は誰が見ても真剣だと分かるように、なにかあったのか、と尋ねた。
そして絶妙のタイミングでお互いの最後のオーダーが目の前に置かれた。すかさずなにも言わずに去っていくバーテンに、私は内心で“空気を読める最高のバーテンダー”という称号を与えた。
子供みたいに手を握りあって数分が立った後、意を決したように彼女が私の手を強く握り返した。
「……プロジェクトの第二段階として、あの子の新しい身体を準備しているの」
言葉の意味を理解するのに少々の沈黙が必要だった。
「新しい……身体？　なんのために？」
今にして思えば、私の質問は愚問でしかなかった。自分で言ったのだ。プロの世界で何年も飯を食っていたら、悪くならないほうがおかしい、と。
私の質問に、メリリーは目を逸らした。彼女があまりその話題に触れたくないことを証明する、いつもの動きだった。
「あの子の今の身体……ガタガタとまではいわないけれど、もう今シーズンで廃棄する必要があるのよ」
「へえ……そいつは大変だな……」
半ば他人事のように私はそう言った。ロボットの身体についての権威は彼女であって私ではない。車にエンジンを載せかえるようなものかと私は安易に想像していた。
だが事態は私が考えていたよりもずっと深刻だった。
「来シーズンには、彼女は別人になる」
「なんだ？　スペックが変わるのか？　百マイル投げられるようにするとか？」

私は笑いながら肩をすくめたが、メリリーは対照的に少しも笑っていなかった。
まさにお笑い種だ。私の質問はあまりに的外れだったのだから。
「そうじゃないわ。今現在のエリーシャのＡＩを基礎として、全て生まれたときそのままのあの子をもう一度作るの。これがプロジェクトの第二段階にあたるのよ。あの子は全く衰えないまま、昔と何一つ変わらない実力をこれからも維持する……上手く行けば、何十年も」
「話が見えないな……私にも分かるように言ってくれないか？　それなら別人ってわけじゃないだろ？」
メリリーは溜息を一つつくと、恐ろしいほど澄んだ目で私を見つめた。
「あの子、エリーシャの現在の記憶によって形成されている人格、ＡＩは自身の身体の劣化、損耗状況に大きく依存している。スペック上のコントロール、スピード、球質だけじゃなく、例えば貴方との呼吸とか……打者との駆け引きとか、直感のようなものとか……全てこの十年間で彼女の身体が蓄積してきたものなの。壊れかけている今の身体が、あの子をあの子たらしめているのよ。例えば私と貴方の家のテレビが全く同じ商品だとするでしょう？　でも、貴方の家のリモコンはチャンネルエイトのボタンが少し潰れているかもしれないし、私の家のリモコンはディスカバリーチャンネルのボタンかもしれない。全く同じスタートラインでも、全く異なる劣化の仕方をするのよ。全く同じ時を過ごすことなんてできない。全く同じ十年を与えることは出来ないから」
すらすらと早口で淀みなく解説するメリリーに、待ってくれ、と私は言おうとした。言おうとしただけになったのは、今の説明の意味が、直感だが、分かりかけてきたからだ。
ロボットの、いやエリーシャの記憶とやらがどういう仕組みなのかは私には完全には理解できない。ただ、彼女の今があるのは、今の彼女の身体があるからなのだということだけ分かれば、私にとっ

ては十分だった。
　そして、その身体はもう、今シーズンで廃棄されるという。つまり――
「つまり……その……エリーシャは、今年いっぱいで死ぬってことか？」
「リッキィ、おかしなことを言うのね。あの子は機械であって、人間ではないわ。死ぬと言う言葉はこの場合当て嵌まらないと思うけど。エリーシャ・ナッツは来シーズンも変わらず、ローテーションを守って、貴方とバッテリーを組むのよ。これまでと何一つ変わることなく」
「でも、それは違うエリーシャなんだろ？」
「今まで私たちと過ごしてきたあの子とは違うのは確かね。見た目も実力も全く変わらないけれど」
　このときの私の心境をご理解いただけるだろうか。私は言葉を詰まらせ、メリリーはただ静かな達観した目で私を見つめていた。その目がこの事実がどうにもならないことであることを告げていると私は直感した。
　この時のメリリーの心境は想像を絶する。まるで母のように接していた彼女が、あまりにも冷静に娘が別人になることを受け入れているのだ。少なくとも、そうあろうとしたのだ。
――あろうとしただけ。握った手が小刻みに震えているのを私は感じていた。
「君は、それで良いのか？　その……」
　私の質問は引き金だった。これ以上喩えようがないほどに。
「良いわけないでしょ！」私の手を振り払ってメリリーは吐き捨てた。「十年よ！　プロジェクトに参加して、あの子を作って、色んなことを教えて、一緒に過ごして、貴方に出会って、三人で過ごしたり、二人で貴方のこと話したり、色んな、」
――思い出があるのに。
　私は無言で彼女の激昂を受け止めた。この時の時間の感覚は、今

思い出しても曖昧だ。少なからず私もショックを受けていた。あの時はそんなことに思い至ることはなかった。なにせ先の質問がどれ程無神経なのかに思い至ったのは、今こうして皆さんに語っている今になってなのだ。

そう、我ながら無神経極まる。

エリーシャ・ナッツをただのロボットだと言い切れたら、私はどんなに楽だったろう。

思い出。そんなもの、私にだって捨てきれないほどあるのだ。

それで良いわけが、平気なわけが、あるものか。

「……ごめんなさい」

メリリーが俯いた。声を荒げたことに対してか、それともこの話を聞かせるつもりはなかったということか、自分だけが辛いような口ぶりになったことか、いずれにせよ私は謝罪を受け入れるつもりはなかった。そもそも私がメリリーに何かを言える筋合いではない。

なにも、助けてはやれない。メリリーにも、エリーシャにも。

「今シーズンいっぱいはもつのか？」

気詰まりなお互いの沈黙の後、私はグラスを空けて尋ねた。

「多分ね……確実とは言えないけれど」

「どうして確実とは言えないんだ。君が製作者なんだろ？」

「……ごめんなさい」

小さな謝罪の声に、私は耳を傾けるべきだった。メリリーの気持ちを慮る余裕が必要だったはずだったし、また彼女はそれを求めていたはずだった。甲斐性なしと言われても反論のしようがない。頭で理解していることと感情の制御が可能か否かは別次元の話というだけだ。

「今の……エリーシャと過ごせるのは、もう長くないってことなんだな？」

私は自分に言い聞かせるつもりで言った。煮えた頭には難業だったが、今後の彼女の登板日の予想を頭から引っ張り出し、残り少ない今のエリーシャとの共同作業に想いを馳せた。それ以外はどうす

る？　彼女は私の家にいる。私はどんな願いも聞いてやれるだろう――

答えの代わりに置かれた眼鏡をかけ、メリリーは最後のスコッチソーダを一息で乾した。

「調整してなんとか誤魔化してきたんだけれど……多分、もう限界に近い状態だわ。いつ壊れてもおかしくないし、それが明日でも私は驚かない。そうなったらあの子は……ふふ、この場合も、故障者リスト入りって、言うのかしらね」

彼女は自分の冗談で無理矢理笑みを作った。そしてすぐに顔を伏せ、私のほうを見ようとしなかった。肩が小刻みに震えていた。彼女にも限界が来たようだと私は思った。

そうして、それが嗚咽が漏れないようにしているのだと分かったとき、私は彼女がどうして私の家ではなく、ここを選んだのかを理解した。私の家では、エリーシャにばれる。

子供というのは親が泣く事に敏感なものだから。

心配性なんだから、マムったら。私どこにも異常なんてないのに。

エリーシャの声が頭に響いた。確かにな、エリーシャ。異常なことじゃない。どこにも異常なんてなかった。正常に、君はゆっくりと、人間のように、あるべき流れである“死”に向かっていたんだ。

「登板のたびにメンテナンスに来てたのは、だからか」

去年までとは明らかに違いすぎるメンテナンスの頻度。いつからメリリーは気付いていたのだろう。エリーシャの製作者であり、このプロジェクトとやらの責任者の一人でもあるメリリー。エリーシャ・ナッツの母親にして、製作者、天才ロボット工学博士。

このことを予想していなかったわけはないだろう。それでも、ギリギリまで、限界近くまで彼女は回避するために努力はしたのだ。多忙の身に鞭を打ち、忙しさの間隙を縫って、一週間に一度、彼女は全米のどんな場所にもやってきた。

――どうにかして、娘が壊れずに済むように。

本人にも、私にも知らせずに、たった一人でそれを抱え込んだの

だ。
　私は衝動的にメリリーの肩を掴んで引き寄せた。溢れそうになる声を、彼女は私の胸に顔を埋めて、シャツを握り締めることで堪えようとした。
「我慢するな、マム」私は彼女を抱きしめた。「我慢なんて、しなくていいんだ」
この時だけは、人前だろうが日本人だろうが文化がどうだろうが、そうするべきだと私は思った。私が衝動に従ったように、彼女も自分の衝動に従うべきなのだ。

「よう、相棒。今日は負けないぜ」
　ピンストライプのユニフォームを着たジョニーを球場で見るたびに、私はその奥に白と濃紺のユニフォームを着た彼の姿を想像する。つまり、彼がまだチームメイトだった頃のことをだ。
彼は私とエリーシャが外野でランニングをして身体を温めているところにやってきた。これから戦う選手たちが試合前にこうした挨拶を交わすことは珍しいことではない。
　私は苦笑した。彼が今でも私のことを相棒と呼んでくれていることは純粋に嬉しかったが、
「元、だよ、ジョニー。間違えないでくれ」
　そう訂正する必要があった。彼と私が同じユニフォームを着ていたのは去年までの話だ。私もいい加減吹っ切る必要があるのは自分でも分かっていた。当然、彼も。
そのことに私以上に敏感に反応したのはエリーシャだった。
「そうよ、ジョニー叔父さん。リッキィは、今は私の相棒なんですからね」
「リッキ。あるいはイバ」
　溜息と共に私は訂正を要求した。エリーシャはぶんむくれて私を睨み、ブルペンの方へ走っていった。その様子を目を細めて眺めていたジョニーは、喉の奥で笑いを堪えながら私に視線を戻した。

「お前さんの風変わりなこだわりが懐かしいぜ、イバ」
「……今日はあんたが投げるんだろ？」
聞くまでもないことだった。ローテーションでそうなっている。彼らセインツはドアマットチームにスウィープ（同一カード全敗）されるつもりはないはずだ。そしてファンはどちらに転ぼうと手に汗握り息詰まる投手戦を期待しているだろう。
『聖者の行進』を先導する大投手と、歴史的貧打線に足を引っ張られるスーパーヒロインの対決。見応えのある試合になるのは、観客よりも私たち選手のほうがよく分かっていた。
「ああ。姪っ子と投げ合うってのは、なかなか感慨深い気分になるもんだな」
不思議な話だが彼らの対決はこれが初めてだ。それにしたって年寄りくさいことを言ってくれる。私はそう笑おうとした。頭の片隅に昨晩の出来事がなかったらそう出来ていたはずだ。姪っ子という単語に私は過剰に反応してしまった。
ジョニーにも真実を知る権利はある。エリーシャのことを家族同様に思っているのだから。それでも私は、そのことを武器に彼を動揺させることも、私が既に動揺しているという弱みを見せることも嫌だった。プロとして、これから戦う相手として、それが当然の礼儀に思えた。たとえそれがいずれ――もしかしたら今日この日にこの場で分かってしまうことだとしても。
「どうかしたか？」
ジョニーが怪訝な顔をしたので、ぼろが出る前に私はこの場を辞するべきだった。
「いや……元相棒を打ち負かしてやるのも、なかなか感慨深い気分になるもんだよ。十歳児のお守りの続きがあるから、またな」
「言うようになったぜ、この野郎。全打席手も足も出ねえザマにしてやるからな」
「おかしいな、あんたが私につけてくれたあだ名を忘れたのか？」
「あん？」

「『ミスター・なんでも振ります』」
ジョニーと拳を付きあわせ、私はブルペンに向かって歩き始めた。お守りの続き、虫の居所の悪くなった十歳児をなだめるために。気が重かった。そんなことすら愛しい、かけがえのない時間になりつつあるのだ。
「イバ！」ジョニーの大声に私はどきりとして振り返った。「相棒に伝えとけよ。『聖者の行進』に同伴させてやるってな」
私は不適に笑っているジョニーの顔をしばらく見つめ――不覚にも口元が緩んだ。
――もしそうなってくれたら。
彼女はＫＯされてそれほど終わりに向かって歩みを進めずに済むのかな、などという相棒として唾棄すべき考えに囚われかけたことは、今この場で皆さんに懺悔しておく。

試合は予定通りの時刻に開始された。観客は満員。シーズンのチーム成績がいかに不甲斐なくとも彼らは応援に来てくれる。ありがたいことだ。それがＭＬＢ有数のむくつけき男どもの鼻っ柱を叩き折る美少女を見に来たという物見高い理由であっても。
投球練習を終え、私はプレイのコールがかかる前にマウンドへ向かった。
「どうしたの？」
たどり着いた私を、少し驚いたようにエリーシャは見つめた。普段の私はこんなことをしないからだ。
「調子は？」
「はあ？　いつも通りだけど？」
「なら、良いんだ」
私は所在なくボールを擦り、彼女に投げ渡した。情けない話だ。その時が来るのが今日か、次か、その次か、それとも目の前で壊れることなく彼女は死ぬのか、私は恐れていた。少しでも長く、マウンドにいる今のエリーシャと話したかったのかもしれない。

「ねえ、リツキ。どうしてそんな不安そうな顔してるの？」
「君にそんなことを言われるほど、落ちぶれちゃいないつもりだ」
まったく、子供の勘というのは侮れない。私はマスクを被ってホームを目指した。これ以上話しているとどこまで悟られるか分かったものではない。
しかし強がってみたものの、私はしっかりと落ちぶれていた。一回表の配球はほとんど覚えてない。最も多く打席の回ってくる彼らの調子を見ておかなければならなかったのに、そんな基本的なことすら忘れていた。三割打者が三人並ぶこの脅威の一回を全て三振で抑えたのは私の力ではなく（もちろん投げるのが投手である以上、元々私の力ではないのだが）、私は単なる壁に過ぎなかった。
相手は見ていなかったが、代わりにいつも以上にエリーシャの投げるボールをかみ締めた。
ムービングファスト、カーブ、スプリット、フォーシーム、どれも一級。どれもが一級である投手は貴重だ。どれもが一級である日は、それ以上に貴重。どんな投手も持ち球全てが調子の良い日など有り得ない。
エリーシャの調子は相手がどうあれ最高に見えた。彼女は「いつも通り」などと嘯いたが、面白いことにロボットといえども調子の波があることは人間と変わらない。どんな機械だって良い時もあれば悪い時もある。だとすれば、この日の彼女の調子は天の配剤だったのだろう。
三番のラディ・ジャスティスを外角低めのカーブで見逃し三振にすると、私はボールを置いてベンチへ走った。途上でエリーシャが得意げに突き出してきたグラブに左手を合わせた。
「今年一番の球がきてるな」
「えへへ。マムの調整が良かったのかもね」
「……でも調子に乗るのはあとアウトを二十四個とってからだ」
「ふんだ、リッキィにそんな風に言われるほど、私は落ちぶれてないもん」

「リツキ、あるいはイバ」
「リツキ！」
いつもと変わらない私の訂正と、いつもと変わらないエリーシャの不貞腐れる姿。私はそのいつもと変わらないことに胸をなでおろしつつベンチに入った。
たった一イニングながら、目下のところ彼女の身に何かが置きそうな兆候は皆無だった。だからといって私の不安が頭から締め出されるわけではない。
ベンチに着くと私はレガースを外し始めた。一回裏は私たちの攻撃で、三番である私は打席に立つ（私程度の打者が三番にラインナップされているのだから、今のバッカニアーズの打線がいかほどのものか知れよう）。
フィールドに目をやると、ジョニーの投球練習が始まっていた。彼のことはフォームを見ればおおよそ分かる。セットポジションから突き出した左手を引く力を利用する彼の力強いフォーム。最悪なことに彼の調子は最高のように私には見えた。
となれば紛れもなく今シーズン最大の投手戦になることは明らかだ。まったく、別の意味で不安になる。今日の試合時間は短くなりそうだと私は思った。
だが、そうなると。
私は自分の左手を見つめた。つい先ほどまで、今にも壊れようかというらしいロボットの最高のボールを受けてきた左手。最高の感触だった。それを思えば彼女が今日にもどうにかなるなどという心配は杞憂としか思えない。
それでも。
私は胸の奥に燻る嫌な予感に慄きながら、一つ大きく息を吐いた。
それでも――今にもエリーシャ・ナッツがこの世から消えてしまうのではないか、という不安は決して離れることなく私の頭の中に居座っていた。
投球内容が良ければ良いほど先発投手というのは長くマウンドにい

るのだから。
そしてその不安は最悪の形で的中することになる。

試合はなんの動きも見せず、あっという間に進んだ。七回まで出所要時間は一時間半に届かない程度。驚きの早さは両投手の実力の高さ、そしてテンポの早さの証明でもあるだろう。

七回を迎えた時点まで、私たちは相変わらずだった。つまり打線はジョニーから散発的に二本のシングルヒットを放つのが精一杯で（ちなみにどちらも私ではない）、七個の三振を奪われていて（ちなみにこれも私は一つもない。自慢は出来ないが）、エリーシャはエリーシャできっちりと『聖者の行進』に通行止めをかけていた。

実際はきっちりとどころではない。彼女は一本のヒットも四死球も許してはいなかった。球場内では気の早い誰かが記憶に残る大記録を目の前で見られるのではないかという興奮を隠し切れなくなっていた。

同時に不安を隠しきれなくなっていたのは、セインツの選手たちよりもむしろ私たちバッカニアーズの方だろう。今だから言えるが、おそらくあの時の私たち野手陣は誰もがエリーシャがヒットを打たれることを望んでいた。私ももちろんその一人。

なぜ？　私がいつエリーシャがマウンドで死を迎えてしまうのか、気が気ではなかったということを思い出して欲しい。もう一つ。バッカニアーズが歴史的な貧打線であり、前述の通りジョニーの調子は最高であり、私たちが一点も取れない可能性があるということ。その場合どうなることが予想されるか。

ＭＬＢにはよほどのことがない限り引き分けはない。エリーシャは被安打ゼロ失点ゼロでマウンドを降りることになるかもしれない（その場合、私たち野手陣がどれ程の嘲笑を受けるかをご想像いただけるだろうか）。それともなければ監督は、今のペースの球数だと仮定すれば、十二イニングくらいは投げさせるかもしれない（その

前に私の心臓がどうにかなりそうだ）。
どちらも私たちはまっぴらごめんだったのだ。
祈りが通じたわけでもないのだろうが、七回表になってセインツ打線は簡単にはアウトを獲らせてくれなくなってきた。際どいボールはカットで逃げ、低めの変化球を見極める。さすがに一流打者が揃う『聖者の行進』。彼らは同じ失敗を三度はしてくれない。故に三割の境界線を越えられるのだ。
節目の回であったこともあるだろう。七回は投手にとって、体力的にも精神的にも一番に辛い回とされる。エリーシャの球威も徐々に落ち始めていた。ロボットにスタミナという概念があるのかどうか、不思議に思われる向きもあるだろうが、私だってそこのところを深く知りたい。もっとも理解の及ばないなにかだと予測は付いている。
一番、二番、どちらにも一度ずつあわやという大きなファールをかっ飛ばされつつも、それぞれを低めの変化球で内野ゴロに打ち取ると、私は一度間を取るためにマウンドに向かった。
「今の球、少し甘かったぞ。さっきまでなら空振りをとれてた」
到着した私の第一声に、エリーシャはむっとしたように口を尖らせた。
「……相棒が心配してやってきたのかと思えば、第一声がそれ？」
心配してやってきたわけではなかった。心配なら試合前からずっとしているのだから。球威の落ちを左手が体感して心配が極限に達しただけだ。
私はバックスクリーンのスコアボードを顎で差した。
「記録が頭にちらついてるのかと思ってね」
ただひたすらにゼロが並んだラブ・ゲーム。Hの文字の下にある二は余計だが、両方ともこれがゼロであったなら試合は終わらない。エリーシャはそれをちらりと一瞥した後、言わんとしていることは分かっている、というようにむくれて私に視線を戻した。
「意識するなって言うなら無理。ここまできたら絶対狙うから、完

全試合」
「大いに意識しろ。頭にちらついてるだけじゃ駄目だ、って私は言いに来たんだぜ」
「……え？　なにそれ」エリーシャは吹き出して、「普通はそういう時、記録は意識せずにリラックスしろ、って言うものだと聞いてたけど」
肩が大きく上下している（これが我々で言うところの肩で息をしている状態）のを落ち着かせるように、彼女は一つ大きく深呼吸した。
私もそうした。だが私のは溜息だ。リラックスさせるつもりで言ったわけではなかった。
「記録がかかってなきゃ、君の球威がそろそろ限界だって監督に教えてやらなくちゃいけないからな。だから意識しろ。自分が今、マウンドに立っていられるのは、九回まで投げきることが許されるのは、記録がかかってるおかげなんだってな。ここまできたら、狙え」
私の言葉に彼女は表情を引き締めた。メリリーに瓜二つでありながら大きく違うのは、このマウンドの上の孤独と緊張感を知った瞳だ。メリリーとは違う意味で、私の愛する瞳。
私の言葉は、多分に私の希望と本音が混じってはいたが、真実だった。投手は先発完投、という言葉が忘れ去られて久しい時代である。完全試合、ノーヒットノーラン、そういった記録のかかっていない単なる完封は非常に少なくなった。
さっさと打たれてくれれば、あるいは、あのスコアボードの二という数字が一段上に移ってくれていたのなら、この回でマウンドを降りてもらえるのに――
打たれて欲しい、けれど私は打たれないように彼女をリードしなくてはならなかった。そしてどこかで打たれずにいてくれることをも望んでいた。そのストレスが、私にそんなことを言わせたのかもしれない。
「ねえ、リッキィ」

「リツキ、あるいはイバ」
「……リツキ。ジョニー叔父さんのときも、同じこと、言ったの？」
「ジョニーのときは、私は二十歳そこそこの若造だ。意見なんてとてもとても」
「ミスター・スーレのときは？」
「一度もマウンドに行ってない」
「そっか。じゃあ、私が初めての相手になってあげるね」
「……その誤解を招く言い方もメリリーが教えたのか？」
私の言葉の意味は通じなかったようだ。通じなくて良かったと心底思う。エリーシャが「どういうこと？」と首を傾げたので私は咳払いをしてなんでもないと首を振った。
「で、なんの初めてだ？」
「リツキの檄で気合が入って、完全試合を達成した初めての投手。リツキの力で、完全試合が出来ましたって、リツキがいてくれて、本当に良かったって――」
試合後の会見ではそう答えるから。
そう言ってにっこりと笑ったエリーシャに、私はどんな表情で応えたのだろうか。後に試合のＤＶＤなどでこの場面が取りざたされたときも、私の表情はほとんど見えない。
なぜなら一瞬で振り向いてマスクを被ってしまっているから。

私の力かどうかはともかくとして、エリーシャはその後のジャスティスを三振に仕留めた。どうあれ球威は落ちたままであり、絶妙の制球力でなんとかかわした投球ではあったが、アウトはアウトだ。記録までたったアウト六つ。球場の空気が期待感に満ち始める中、私は足早にベンチへ向かった。裏の攻撃は私から始まるのだ。
ベンチに戻りながら私が思っていたのは、もしかしたらエリーシャはどこかこの日の試合に入れ込み過ぎて臨んでいたのかもしれないということだった。
ジョニーとの初対戦だからか、相手が『聖者の行進』だからか、ま

さかとは思うが自分の身体の状態について把握しているからなのか。真実は今も分からない。彼女は絶好調だったのでもなんでもなく、ただペース配分を度外視した投球をしていただけなのでは――だとすればそれを見抜けなかった私は大間抜けとしか言いようがない。ただでさえ彼女は表情や仕草に疲れが見えないロボットなのだ。判断材料は私の左手に残る感触のみだというのに、私はそれを味わうことに没頭して、肝心な仕事を放棄してしまっていた。

この時の私は自責の念を自分の力に変えようとしていた。それでなくとも、そう、私は少なからず、あの時のエリーシャの言葉に燃えていたのだ。

投球練習をしているジョニーを眺めながら私は二度ほど素振りをした。彼にとってもこの回が節目なのは変わらないはずだ。どんな偉大な投手もそれは決して変わらない。

――そう教えてくれたような、ジョニー・ブラックウッド。

程なくプレイがコールされ、私は打席に向かった。この日、三度目のアットバット。左打席に入ってバットを構えると、ジョニーの射抜くような視線が私を刺した。

『斃す』いう殺気の篭った目つき。彼が敵と相対するときの瞳。メリリーともエリーシャとも違う意味で私の愛する瞳。どんな相手にも全力を投じる心を投影した彼の瞳。いつか私もこの迫力に対抗できるようにならなくてはならないと思っていた。いつかという日がいつか来るのならば、この日がその日だった。

その瞬間、私は天啓を得た。視線が交錯した瞬間、彼のそれまでの私に対する配球も、私の拙い打撃センスによる劣等感も全て頭から吹き飛び、ただどういうわけか『初球を狙え』と私の心に浮かんだ。

バッテリー間のサイン交換が終わり、帽子のつばをぐっと握り締め、ジョニーは集中力を高め始めた。セットポジションに入り、一つ大きく肩で息をすると、一瞬の間をおいて足が上がった。何度もベースの後ろから見てきたフォーム。突き出した左手が引かれ、溜められたエネルギーを解放するように――

次の瞬間、乾いた炸裂音が響き、私はバットを軽く放った。もうこの打席では必要がなかったからだ。気がついたらその場面だった。いつバットを振ったのかも覚えていない。ジョニーが「やられた」というような表情で私を見つめたのは覚えている。

打球を追う必要はなかった。バットから伝わった手ごたえがその必要はないと教えてくれていた。後にも先にも、振った瞬間に「しまった」と思うことはあっても、打った瞬間に結果の分かる手ごたえがあったことはない。

ゆっくりと私が一塁へ歩みを進めると、遅れてバックスクリーンにボールがぶつかった。

球場が割れんばかりの大歓声。それは私がそれまで経験した中でもっとも驚きに満ち、また歓喜に満ちたものだった。審判がホームランをコールし、私は不思議な気持ちのままダイヤモンドを一周し始めた。手ごたえはあった。これ以上ないほど。だが、どんな球を打ったのか思い出せない。現実感の薄れたまま、私は初めてホームランを打ったルーキーのように夢うつつでベースを踏んでいった。

後に分かったことだが、この時の一球はこの試合でほぼ唯一と言って良いジョニーの失投だった。それを過たず狙い打つことが出来たことを誇りに思ってもいいはずだが、私は今でもそうは思えない。彼に対してそう出来たのはこの一回しかないからだ。

歓声を上げて私を迎えたのはもちろんファンだけではなかった。一周してベンチに戻るとチームメイトは大はしゃぎで私の全身を叩きまくった。まるでサヨナラ勝ちのような大騒ぎだった。無理もないだろう。彼らもこれで重圧から一つ解き放たれたのだ。

「リッキィ！」

エリーシャが今にも抱きつかんばかりの勢いで近づいてきたので、私は落ち着け、と手で制した――無駄に終わったが。

彼女の重みを感じながら私は例によって訂正を求めた。

「リツキ、あるいはイバ」

「なんでもいいよ、もう！　ナイスバッティング！」

本当に良いバッティングだったかどうか思い出せていれば、私の通算成績も違ったものになっていただろう。私は記憶からすっぽりと抜け落ちた自分以外の誰かが打ったような感覚に苦笑しながら、彼女の背中を叩いて離れるように促した。

「落ち着け。まだ勝ったわけじゃないんだ」

「勝つよ、私が抑えるもん。絶対に！」

キャッチボール行ってくる、と勇んで外へ出た彼女に、場内は大歓声を贈った。いよいよ大記録達成、その道に終わりが見えてきたことを観客も察しているのだ。

そして続くように私の名前が呼ばれ始めた。敵味方のないスタンディングオベーション。監督が私の肩を叩いて、片目を瞑った。

「行ってやんな」

私はベンチから出て、帽子を取った。沸き起こる拍手。球場内にいるほとんどが私一人に対して拍手をしてくれる感動は、私にとって初めての経験だった。

エリーシャの身体に不安を感じなくなったわけではなかったが、私はこの一試合は彼女に下駄を預けることに決めた。もう既に試合は彼女のものだった。手っ取り早くこの不安から解放されるには、最早彼女が完全試合を達成することの方が早道だと思い始めていた。

四番から始まる八回。節目の次は修羅場だ。年間で私の倍以上のホームランを打つ打者が三人並ぶ回。エリーシャの状態を考えれば、私はこれまで以上にリードに気を配る必要があるはずだった。

だが、その必要は全くなかった。

彼女の球威は驚くべきことに、七回以前の状態に戻りかけていた。気持ちで自分の限界を超えることが出来るのはなにも人間の専売特許ではないのだと彼女は証明してくれた。

四番のバーナード・ウィルをツーストライクに追い込んだ後、決め球に低めにスプリットを落として内野ゴロを、あわよくば空振りさせようと私はサインを送ったが、彼女はそれに首を振った。

真っ向勝負、高めのフォーシームで攻めたいのだ。確かに低めに投げて転がさせれば何かの拍子でヒットになってしまう可能性は高くなる。高めで空振りをとる方が安全だ。だがそれは一つコントロールを間違えれば柵越えが確定する攻め方だった。

――一球、外に見せ球をくれ、それで判断してやる。

あまり無駄に球を投げさせたくはなかったが、それで打たれては元も子もない。彼女は頷いて一球外に外し、ウィルも手を出さずにそれを見逃した。よく解説諸氏に怒られる無駄な一球というやつだ。だが、私にとっては必要な準備だった。

――これなら、空振りが取れる。

球威を確認した私はエリーシャの要求を受け入れ、リードを改めた。サインを変えると彼女は口元を少しだけ上げた。自信に満ちた表情だった。

結局はそれが功を奏したのかもしれない。八回は結局、三者三振に終えることが出来た。カウントを整えるにも変化球は一切使わず、決め球は全てインハイのフォーシームだ。紛うことない、私が受けたボールの中でも最高級の、気持ちが乗った良いボールだった。

一点を失いはしたが、ジョニーは八回もマウンドを降りなかった。その必要は全くなかったといっても良い。なすすべなく凡退していくチームメイトを見ればよく分かる。あっという間に八回の裏の私たちの攻撃を断ったジョニーは、ゆっくりとベンチに戻っていった。今でも鮮明に思い出せる。あれこそがＭＬＢを代表する投手の姿だ。かつて同じことを為した先駆者として、彼は最後まで互角にエリーシャと投げきることを望んだのだ。私のとき以上の拍手に包まれながら、彼は帽子を取って観客に応えた。その背中は誇りに満ちていた。

九回を迎え、いよいよ球場内の緊張感と期待感はピークに達しようとしていた。私はもうマウンドに行く事はしなかった。もう話してやれることはないし、私からエリーシャにしてやれるのはリードで手助けをしてやることだけだった。

ここからは七、八、九番の、一般に下位打線といわれるところだ。油断は大敵であることはもちろんだが、七回、八回に比べれば気を遣わなくていい。遣うべきはエリーシャの身体の調子に対してだけだ。

ありがたくも、あっさりと七番のジャレッド・スウィッシャーは初球を打ち上げてくれた。これは幸運だったと言える。カーブを要求した私に首を振ってまで投げたフォーシームだが、コースは真ん中よりだった。七回までの球威なら、あるいはスウィッシャーが打ち損じの少ない三割を打てる打者だったなら、間違いなく安打になっていただろう。

セカンドへのポップフライに終わり、まずは一死。

安堵の溜息をして放ったマスクを拾い、私はマウンドのエリーシャを見つめた。彼女も少なからずひやりとしたようだが、私を見つめ返すと軽く舌を出して片目を瞑った。

ごめんなさい、失投。とでも言いたそうだったし実際そうだろう。私は自分の胸を叩いてみせ、気持ちを強く持つように鼓舞した。エリーシャに対してよりも、自分に対して。

今の一球は明らかな異常の兆候に思えた。

そうこうしているうちに、次のバッターがコールされる。八番アーロン・ロドリゲス。いずれＭＬＢを代表する三塁手となる素質を秘めた男だ。実際にそうなったのはこのシーズンの三年後だった。この当時は外に変化球を落とせば扇風機のようにバットを回してくれる男に過ぎなかった。

――普通なら安パイも良いところなんだがな。

座って私は再びサインを出した。先ほど感じた不安を確信に変えるために。

予想通り、エリーシャは外のスプリットのサインに首を振った。

――そういうことか、エリーシャ。

私は外角低めにフォーシームのサインを出した。彼女が頷いて投球動作に入るのを見つめながら、八回の時点で気付くべきだった、

と私は後悔した。
八回から彼女は変化球のサインにはすべて首を振っていた。そうして選んだのはすべてフォーシームだ。今、彼女は何らかの理由で変化球を投げるのを嫌がっている。
それが単にスタミナの問題なのか、メリリーの言うエックスデイが、私がずっと不安に思っていたその時が、いよいよこの時にやってきてしまったのか。私は胸の鼓動を必死で抑えた。
どちらにしても、今ここで彼女をマウンドから下ろすわけにはいかなかった。完全試合達成まであとアウト二つ。だがその二つのアウトのなんと遠いことか。
投じられたフォーシームは要求したコースよりも少し外に外れた。感触は悪くない。球威は八回から落ちていない。それだけが私にとってあらゆる意味での救いだった。
――今にも壊れるロボットの投げるボールじゃないはずだ。なあ、神様。お願いだから、十球、いや五球で良い、無事に投げ切らせてやってくれ。
首を振った後に必ずフォーシームが来ていることに気付いていたのだろう。ロドリゲスは狙い球を絞っていたようだった。それでもエリーシャの球威がそれを勝り、二球目の高めの釣り球でサードへのファールフライに仕留めた。ありがとう、A・ロッド。あれに手を出してくれた君が私は大好きだ。
これで二死。場内は水を打ったように静まり返っていた。大記録達成の瞬間が間近に迫っていることを球場の誰もが感じていた。
たった一人、九番のネイサン・ミントを除いては。
セインツは代打を使うことはしなかった。私の言葉をそのまま引用するならば、彼に下駄を預けたのだ。完全試合を喰らわせられる屈辱に対してあまりに無策と思われかねない行為かもしれないが、私が監督でもおそらくそうしただろう。
ミントはファストボールにはめっぽう強い打者なのだ。そして、そうしたからには、既にエリーシャが八回から変化球を放っていな

いという事実を把握されていると見るべきだった。
私が強く要求すれば彼女は変化球を投げてくれるかもしれない。一度首を振ってから投げる変化球なのだからこの場合は効果的だろう（首を振ったらフォーシームがくると向こうが張ってくれているのならばだが）。
だが私はあえてその考えを封印した。分の悪いギャンブルには違いない。無理に投げさせた変化球が単なる棒球になって打たれでもしたら、私は一生後悔することになる。
私は意を決してマスクを被り直した。
――大丈夫、得意なところにまた弱点はある。
右打席に入ったミントがゆっくりとバットを構える姿を見ながら、私はサインを出した。エリーシャは少し驚いたように顎を上げ、二度、小刻みに頷いた。
右足を下げ、エリーシャがゆっくりと振りかぶった。女の子らしい細い両腕の間から覗く彼女の張り詰めた表情は、これまでマスク越しに見たどの投手よりも美しかった。

「百勝目ということは意識していませんでした。セインツは素晴らしい打者が揃っている驚異的な打線だし、私も最初からとにかく腕を振って、全力で投げようと思って。記録については七回くらいから意識してました。いえ、意識しないようにしようと思ったんですが……イバがここまできたら狙えって言ってきたもので。勝てたのも彼のホームランのおかげですし、最後のアウトも彼がキャッチしましたから……あんなダグアウトに転がり落ちるくらい必死になって追わなくても良かったのに。色々な意味でしばらく頭が上がらないですね（笑）。ジョニーについて、ですか？　そうですね、彼に投げ勝てたのは本当に嬉しいですし、前に彼が偉業を達成したこの球場で、彼の目の前で私もこの偉業を達成できたっていうのは、凄く感慨深いです。少なからず投げ合っている彼に刺激されて、引っ張ってもらえた面もあると思いますし、とにかく私だけの力じゃな

くて、皆の力があってのことだと思います。本当に嬉しいです！」

会見を終えた後、すぐに私とエリーシャは車で自宅へと向かった。車に乗る前に、チームメイトの誰もがクラブハウスで大騒ぎをするのに主役のエリーシャがいないという状態は有り得ないと彼女を引き止めたが、私は頑として連れて帰ることを主張した。彼女は誰よりも先にこのことを報告したい人間がいるはずなのだ。メリリーを私の家にいることを告げると、皆は快く（一部は渋々と）送り出してくれた。

帰りの車中で、助手席に座っていたエリーシャは窓の外の景色を眺めながら、時折思い出したように可愛らしく笑みを漏らし、カーステレオから流れる曲に合わせて鼻歌を歌っていた。

「えへへ……ねえ、リッキィ」

「リッキ、あるいはイバ」

私の訂正を聞き流し、エリーシャは窓の映りこみごしに私を見た。

「ジョニー叔父さんも、ミスター・スーレも、こんな気分だったのかな？」

「さあな。私は投手じゃないから分からない」

「でも、きっとこんな気分だったんだろうな。なんだかふわふわした気分。現実感がないみたい」

「心配しなくても、現実だよ。私を含めた球場にいた全員が証人だ」

そう言ってはみたものの、私もどこか現実感のない状態だった。最後のキャッチャーフライを追っている時間。落下してくるボールにミットを差し出した瞬間。そしてボールがミットに収まった瞬間の感動はなにものにも例えがたい。そして、その時の安堵も。彼女との別れがあの場で訪れなかったことの安堵も、なにものにも例えがたいものだった。まだ彼女と過ごす時間が残されていることは嬉しかった。それに比べたらしたたかに身体を打ったことなど、どうということもない。

「そういえば、エリーシャ」最後のシーンを頭で反駁して、私はふ

と思い至った。「ウイニングボールはどうしたんだ？」
「ウイニングボール？」
「最後のフライを取った後、君に渡しただろう？　記念のボールだぞ。百勝目でもあるんだ」
　ああ、と彼女はけろりとした表情でポケットからサインペンを取り出した。いつも彼女が持ち歩いている、サイン用のペンだった。彼女はサインを求められたら決して断らないのだ。
「サインして、観客席にいた子供にあげちゃった」
「……なんだって？」くるくるとペンを回して弄ぶエリーシャに、私は目をくるくる回して尋ねた。「正気か？　記録に残る偉業の証明だよ。思い出の品になったかもしれないのに」
「ふーむ、だわ」
「ふーむ？」
「観に来てくれたあの子の思い出の品になってくれたら嬉しいな、って思って」
「君の思い出の品に、っていう意味だったんだが」
「私には必要ないよ。だってリツキが一番近いところで見ててくれたもの。それで十分。ほらほら、前ちゃんと見て運転して」
　満足げに微笑むエリーシャとは対照的に、私は大いに落胆していた。思い出の品が欲しかったのは私だったのだ。彼女が成し遂げたおそらくは最後にして最高のピッチングの証明が欲しくないはずがない。
そしてエリーシャのなんの気のない言葉に心が痛んだ。それはずっと一緒にいられると信じているからこそ出てくる言葉だった。これからも、いつか私が引退の日を迎えるまで、ミットを構え、リードをして、彼女の投げるボールを受けるのだと彼女は信じていた。いつか、どころかすぐ近くまで迫っている別れのときを彼女は知らないのだと私は実感した。
「……なにか、まずかった？」
「いや、君がそれで良いのなら」私の顔を覗き込んで申し訳なさそ

うな声を出した彼女に気を遣うだけの分別は私にもあった。「一生の思い出になると思うよ。その子はツイてるな」
言葉に感情が篭らないよう努めたつもりだったが、彼女は敏感だった。
「もしかしてそのボール欲しかったの？」
私は答える代わりに頭をなでた。形に残るものが欲しかったのは確かだが、なによりエリーシャに気を遣わせたことの方が私には堪えた。
「君の言う通りだ」
「なにが？」
「君がいてくれるなら、それで十分」
――そう、十分なはずだ。彼女がこれからもずっと私たちと共にあるならば。
実際はそうならないから、十分ではないだけのことだ。しかしそれを口にするほど私は愚かではない。口にしたところでボールが私の手元にやってくるわけではないし、彼女との別れが避けられるわけでもない。
「その子の、一生の思い出になりますように」
私の言葉に気を良くしたのかエリーシャは照れたようにはにかみながら鼻歌を再開した。
我が家までの道程は車ではそう長いものではない。私はしばらくの間カーステレオと、それに合わせるエリーシャのハミングに耳を傾けていた。
「ねえ、リッキィ？」
道程の半分ほどのところ、曲の切り替わるタイミングで、エリーシャは再び私を呼んだ。私はいい加減訂正を求めることに飽き飽きしたというアピールのため、アクセルを少し強く踏みこんだ。
「メリリーはどうやら、しつこいのは嫌われるってことは教えてくれなかったみたいだな」
「……マムと何かあったの？」

突然の話題の飛躍に、彼女がなにを聞きたがっているのか、私には分からなかった。
「何もない。どうして？」
質問の意図が分からない私に、エリーシャはためらいがちに口を開いた。
「あのね……なんだか、今日のリッキィは……試合に集中出来てないみたいだったから」痛いところを突かれて私は内心でどきりとした。子供というのはどうしてこう敏感なのか。「もしかして、昨日マムと喧嘩でもしたんじゃないかと思って」
その時の私に出来たのは苦笑だけだ。確かに今日の私の心理状態はメリリーがもたらしたものだ。メリリーと、そして知る必要もないことだが、エリーシャによって。
彼女がそう思っているのなら、そういうことにしておいたほうが良い、と私は判断した。
「喧嘩したことは何度もあるけど、メリリーが私にとって特別な人であることは変わらないよ。これからもずっと」
「うわあ、マムに聞かせてあげたい……ね、リッキィって時々凄く気障なこと言うよね」エリーシャは両手を頬に当ててからかうような視線をよこした。「ね、リッキィ。どんなことで喧嘩したの？もう仲直りできたの？」
「今後の君の教育方針についてだ」
間髪いれずに私が言うと、彼女は目を丸くしてぽかんと口を開けた。
「はい？」
「君が私のことをリッキィと呼ばないようにするにはどう教育したら良いのか、という点で二人の意見にすれ違いがあった」
「……ふーむ、だわ」
「ふーむ？」
しばらく腕を組んで考え込んだエリーシャは、真犯人に証拠を突きつける探偵よろしく人差し指を突き出した。

「リッキィが私にそれを許してくれれば万事解決の気がするけど？」
「それは絶対に駄目だ。君はメリリーじゃないから」
間髪いれずに答えると、エリーシャは黙り込んだ。てっきり「えー、どうして？」とか駄々をこねられると構えていた私にとっては肩透かしの反応だった。ちらりと横目で助手席を見ると、彼女は今にも泣きそうな表情で俯いていた（もちろん彼女は涙が出るわけではないが念のため）。ふくれっ面でぶんむくれている姿を想像している私は、内心で大いに慌てた。
「私は――」やがて口を開いた彼女は少し震えた声音で言った。「私は、リッキィにとって、特別な人じゃないってこと？」
――ああ、そうきたか。
私は何度訂正を求めても彼女がしつこくリッキィと呼ぶことの意味をようやく理解し始めた。
リッキィと呼ぶのを私が許しているのはメリリーだけ。特別な女性だから。
だからエリーシャもそうしたいと思ってもなんら不思議はない。子供というのは親のありようを見て育つもの。今のエリーシャはなにごとにも興味を持ち、親を真似たくなる年頃なのだ。
親と同じように私に特別扱いしてもらいたかったのだ。
私はエリーシャに何を言ってやるべきか、既に思いついていた。ほんの少しの勇気と、気恥ずかしさに慣れるまでの時間さえあれば、それは実現可能だった。
「なあ、エリーシャ？　提案があるんだが」
「……なに、リツキ」
リツキ、のイントネーションには多少の棘があった。勝負どころなのは明白だった。私はカーステレオを消して、耳が熱くなってくるのを感じながら言った。
「パパなら良い」私の言葉にエリーシャは呆けた。「君さえよければ、そう呼べば良い。君だけの、特別な愛称だ」
エリーシャはしばらくじっと私を見つめていた。その間は車のエン

ジン音だけが響いていた。
随分長い時間そうだった気もするし、それほど長くはなかった気もする。気恥ずかしさに耐え切れず、私はカーステレオをつけた。
やがて彼女は、
「パパ……パパか」にやにやと笑いながら何度も語感を確かめるように呟く。「不思議な気分。疲れが吹き飛んじゃった。なんだかくすぐったい感じがするね？」
どうやら泣きそうな表情も吹き飛んでくれたようで、私は安心した。
「他のが良いなら提案は随時受け付けるよ」
「ううん、パパが良い……ねえ、私だけが呼んで良いの？」
「今のところ君以外に娘はいないよ」
「そっか……そうだよね。えへへ、パパか……ねえ、パパ？」
「なんだい、エリーシャ」
「……呼んでみただけ」
しばらくの間、パパ、パパと助手席から音楽にあわせて聞こえてくる時間が続いた。その時の私は耳まで真っ赤になっていたことだろう。心底、エリーシャがうらやましいと思った。パパと呼ぶ誰かが出来たことではない。彼女はどんなに恥ずかしくても顔色には出ないから。
だが、断っておくが――決して悪くない気分だった。
「……ねえ、パパ？」
「なんだい、エリーシャ」
「少し眠っても良い？」
リクライニングを少し傾けて、彼女は目を擦った。
「疲れが吹き飛んだんじゃなかったのか？」
「一緒に張ってた気も飛んでっちゃったみたい。少しエネルギー節約しないと、マムに今日のこと話をする前に朝まで寝ちゃいそう……」
「仕方ない奴だな……音楽、少し下げようか？」

「ううん、大丈夫」
本当に眠そうだった。次の交差点を曲がって、あと十分もまっすぐ車を走らせれば我が家まではあっという間だったが、私は了承の意味で頭を撫でた。
「着いたら起こすよ。あと十分もないと思うけど」
「うん……ねえ、パパ？」
「なんでもない、呼んでみただけっていうのはなしだぜ」
くすりとエリーシャは微笑んだ。そして自分の頭をなでていた私の右手を取って、両手で握り締めた。片手運転になるが良いのか、という無粋な意見はここではなしだ。子供が甘えているときくらい、親は全力で応えてやらなくてどうする。もうステアリングなんて添えるだけで良いのだし。
私は握り返した。彼女が眠りにつくまで、私が傍にいることを感じていられるように。
「なんか凄く幸せな気分……ありがとう、パパ。おやすみ」
「おやすみ、エリーシャ」

皆さんがこの後の顛末についてどのような予想を立ててておられるかは大いに想像がつく。そうならないでくれと思っていただけているのなら幸いだが、残念ながらご想像の通りだ。
エリーシャはそれきり目を覚ますことはなかった。あらゆる意味で。
家に着いたところから、彼女が目を覚まさないことをメリリーに話すまでの私の記憶は全くない。その時の私について、メリリーに聞いてみたこともない。聞くまでもないことだ。
私が落ち着いてからメリリーに聞かされた話では、エリーシャの身体は試合中に限界を超えていたのだそうだ。あくまで予想でしかないが、おそらく七回がその限界だったのだと思う。八、九回の彼女がフォーシームしか投げたがらなかったことを告げると、メリリーは、

「多分、余計なソフトを自力で消去して、容量を軽くしたんだと思う。ハード面にかかる負担を軽減して、少しでも長く投げられるようにしたんじゃないかな」

ということらしい。どういう仕組みか分からないが、それなら投球に関すること全てを消去していたら彼女は生きていられたのではないだろうか。

そう私が問うと、メリリーは悲しそうに目を伏せた。

「それを、投手をするために生まれてきたあの子が、出来ると思うの？」

もっともな意見だ。だが、私は投手エリーシャ・ナッツではなく、一個の存在であるエリーシャ・ナッツに生きていて欲しかった。

もちろん、それはメリリーも同じだったことも伝えておく必要があるだろう。後に彼女は、あの時の私があまりに酷い状態だったために自分が冷静にならざるを得なかった、と不満そうに語ったことがある。この点に関して、私は今でも彼女に頭が上がらない。

補足になるが、新しいエリーシャの誕生は見送られた。製作者でもあるメリリーの希望で、エリーシャ・ナッツという名を使わないという決議がプロジェクト内でなされたらしいことが理由の一つ。もう一つが、その決議の行われる直前にメリリーがこのプロジェクトから身を引くことを決意したからだ。ロボットの製作に嫌気が差したわけではない。単純に、興味が自分の子供の成長にシフトしたからだった。その後、このプロジェクトとやらがどうなったのか、私は知らない。興味もない。少なくとも、エリーシャ以上のロボット投手が誕生したことはなかったとだけお伝えしておけばいいだろう。

さて、以上をもって今回の私の話には一応の決着が付いた。ここまで皆さんに付き合っていただいたことには、本当に感謝している。蛇足ではあるかもしれないが、私が今回この話を書くきっかけになった出来事をカーテンコールに代えたいと思う。

引退して日本に帰国した私がＭＬＢのドラフトを取材するためにアメリカ入りしたその日、定宿としているＬＡのホテルに一つの小包が届けられた。差出人は私が現役時代の頃から懇意にしていた番記者だった。

彼ならば私の滞在先を知っていてもおかしくはない。特に警戒せずに封を開けてみると、中身は野球のボールが一つと手紙が一通。手紙を書いたのはどうやらその番記者ではなく、驚くべきことに全米一位での指名が間違いないといわれる選手だった。首を捻るばかりだ。まさに今回のアメリカ入りで取材するはずの選手であり、もちろん私とは一面識もないはずである。

私はなにがなにやら分からずに手紙を読んだ。書かれていた内容はごく短いものだった。

「私の原点であり心の支えです。夢が叶った今、このボールはあるべき場所にお返しします」

私はその『原点であり心の支え』であるというボールを見つめた。何の変哲もない、古ぼけたボールに見えた。そして一周させてもう一度よく見てから、その言葉の意味を悟った。

一瞬視界がぼやけたが、間違えようがない。何度も見た字だ。何年にも渡って。彼女がサインを練習すると言って聞かなかったときから、この字を何度も何度も見てきた。

私はボールを胸に抱いて膝をついた。心底神に祈りたい気持ちだった。

女の子らしい癖のあるサイン体で、ボールにはこう書かれていた。

「Ｆｏｒｇｅｔ　ｍｅ　ｎｏｔ（私を忘れないで）」

終

（後書き）

第十八回電撃小説大賞の三次選考にて落選。
選評も届いて区切りがついたので投稿してみました。
ご感想などいただけたら幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2357y/

Forget me not

2011年11月5日06時11分発行